

御かしづきよりほかのことなくおぼしたれば、御てうどどもよりはじめ、よろづの御ぐどもかがやくやうに、漢書の御屏風文集の御屏風どもなどしあつめ給なれば、げに内春宮にまゐり給はんもたへてみえたり、

〔江談抄〕<sup>五</sup>美材書文集御屏風事

又云、小野美材内裏文集御屏風書了、奥書大原居易古詩聖、小野美材今草神云々、

〔類聚名物考〕<sup>調度四</sup>樂府屏風。がふのべうぶ

白氏文集に新樂府五十餘首あり、是を古へはことの外にもてはやしたる事物に多くみえたり、紫式部日記、清少納言記にもみゆ、是を屏風にもか、れしなるべし、畫か書か、その事は未考、

〔本朝畫史上〕<sup>二</sup>古畫錄、師足以畫鳴于時、畫樂府屏風、具載大鏡、

〔增補考古畫譜〕<sup>三</sup>樂府屏風

春村曰、師足といへる高名の畫師、いにしへあることなし、もろたるは弘高の誤なり、堀忠寶云、所藏大鏡古抄本には、ひろたかとあり、以て證すべしといへり、畫工便覽に諸垂とし、皇后宮大進など、官名をさへに推當に記せるは非也、

〔大鏡〕<sup>五</sup>

太政大臣爲光、男君太郎は、左衛門督さねのぶときこえさせし、<sup>略</sup>中いみじき上ごにてぞお

はせし、この關白殿のひと、せの臨時客に、あまりゑひて御座にゐながら、たちもあへ給はでものつき給へるにこそ、かう名のもろたかがかきたる樂府の御屏風にかゝりて、そなはれたんなれ、

〔本朝畫史上〕<sup>二</sup>古畫錄、宇多天皇、世奉稱、寬平法皇、至政道則不及論之、天性嗜畫、圖寄心於丹青、會寫長恨歌之意、圖亭子院之屏風、

〔伊勢集上〕長恨歌の御屏風、亭子院のか、せ給て、所々よませ給ける帝の御手にて、